

地方都市住民の拡大パーソナルネットワーク  
—年賀状調査にもとづく事例分析—

## I 拡大パーソナルネットワーク概念と年賀状事例調査の方法論的検討

1. 研究の目的
2. 方法論的検討
3. 事例紹介：地域活動リーダー層のパーソナルネットワーク
4. まとめと考察

矢部 拓也\*

### 要 約

本研究の目的は、拡大パーソナルネットワーク分析を目的として、これまで2度行ってきた年賀状事例調査の方法論的検討を行うことである。本研究と同様の拡大パーソナルネットワークを研究対象としているボワセベンの研究と比較することで、年賀状事例調査の特徴を整理した。その結果、年賀状事例調査は、基本的には対象者と直接の紐帯をもつ人々との関係（2者間の相互作用上の関係）に関しては、多くの要因に関して分析可能であるが、ネットワークの構造を現す諸変数に関してはわずかに「規模」と間接的に「クラスター」を測定できるに留まっていることが明らかになった。

また、ボワセベンのパーソナルネットワークのモデルでは、ネットワークは「親しさ」という一元的な規準によって同心円的に配置されるが、年賀状調査の結果では、「親族」「友人」「同窓生」「同僚」「サークル仲間」・・・といった、社会的文脈ごとにパーソナルネットワークがまず区分され、その上で各カテゴリーごと独自の分類規準が存在している様相が明らかになった。そしてこれらの社会的文脈は、対象者のライフヒストリーとも関連している。そのため、年賀状事例調査では、パーソナルネットワーク形成過程とライフヒストリーとの関連を明らかにすることができるという利点をもっている。

最後に、このような年賀状事例調査の利点が生かせる対象である武蔵野市のコミュニティ活動のリーダー2名のパーソナルネットワークの事例分析を行った。コミュニティ活動に参加する過程を、ライフヒストリーと既存のパーソナルネットワークの再編過程から描き、パーソナルネットワークの形成発展過程の一事例を示した。

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、これまで2回行ってきた年賀

状を用いた拡大パーソナルネットワーク分析を目的とした事例調査の方法論的検討を行うことである。これまで2度の、年賀状を元にした拡大パーソナルネットワーク分析は森岡、矢部を中心とし

\*東京都立大学大学院社会科学研究所（博士課程）

て進められてきた(森岡、2001: 森岡編、2000: 森岡研究代表者、2001: 矢部、1999)。森岡(2001: 154)は、拡大ネットワークを、「親密な紐帯を含みつつ、その外側に広がるネットワークの全体(本来、この全体こそパーソナルネットワークに相当するものではある)」と定義している。そして、従来のパーソナルネットワーク研究を「問題関心・テーマ設定と調査方法の両者に由来して、親密な他者とのネットワークを対象を限定させてきた」と総括し、その上で、年賀状を用いたパーソナルネットワーク分析の意義を、(これまで)「親しい他者との紐帯にパーソナルネットワークを限定してきた結果、都市社会の諸集団や諸機関とのつながりが見出せないだけでなく、地域社会における人びとのつながりやライフコースに伴う変容なども捉えられなくなっていた。特定の専門領域では、この点、重要な問題とみなされるようになっていく。ライフコース論の立場からも、生活構造論の立場からも、パーソナルネットワークの対象を広げ、時系列的変化を追えるものにする必要があるとされてきたのである。」としている。つまり、拡大パーソナルネットワークを把握することにより、パーソナルネットワークと「①都市社会の諸集団や諸機関とのつながり」、「②地域社会における人びとのつながり」、「③ライフコースに伴う変容」が把握できると主張している。

森岡の主張するように、パーソナルネットワークに関する事例研究においても、ネットワークの特定の領域(機能)に限って議論されたものが多い(グラノヴェッター、1974、1995: 前田、1995: 藤崎、1998)。そのため、当然ネットワークの規模も限定されたものになっている。その中で、本調査同様にネットワークの規模を広く扱った先行研究として、社会人類学者のボワセベン(1986=1974)の研究が挙げられる。但し、ボワセベンの対象地は、1960年代のマルタ、シチリア、モンテリオールの小社会であり、我々の研究対象地である都市社会とは異なっている。しかし、ネットワーク研究は社会人類学から生まれていることもあり、調査対象地は異なっても、ネットワーク

研究方法論に関する議論は非常に参考になる。そこで、本研究では、年賀状調査を、ボワセベンのネットワーク研究と比較しながら、研究対象である拡大ネットワーク概念の精緻化を行う。その上で、拡大ネットワークを対象とした、パーソナルネットワーク形成過程の事例として、今回、聞き取り調査を行った武蔵野市のKコミュニティセンターに所属する地域活動リーダー2名の事例分析を通じて、上述の3点に関する議論を行う。

## 2. 方法論的検討

### 2. 1 年賀状調査の分析の方法

年賀状事例調査は、「年賀状全体の分類の仕方」「それぞれの年賀状の差出人との関係」「知り合ったきっかけ」「現在会う頻度」「年賀状差出人の基本属性」など基本部分ではあらかじめフォーマット化された調査票をもとに聞き取りを進める半標準化された調査である。聞き取りの進め方は、研究者が予め設定した枠組みに沿ってパーソナルネットワークの区分や分類をするのではなく、対象者自身のパーソナルネットワーク全体への主観的な区分の仕方の析出を目指している。対象者には、まず、年賀状を普段分類しているように、自由に幾つかのグループに分けてもらう。そして、それぞれのグループへの分類基準やそのグループに対する対象者の主観的意味づけを聞き取る。その上で、分けられたグループごと、そのグループにおいて重要である人から順番に並べ変えてもらい、1枚1枚、事前にこちらで設定したフォーマット(出会った機会、交際期間、現在の交際頻度、性別、年齢、職業、学歴、居住地など)に沿って聞き取りを行う。このような手順により、それぞれの個人が対象者にとって、どのような関係性であるのかを、対象者のパーソナルネットワーク構成の文脈に沿って理解できるような設計を行っている。

### 2. 2 ボワセベンの問題意識: 構造—機能モデルからネットワークモデルへ

具体的なボワセベン(1974=1986)のネットワー

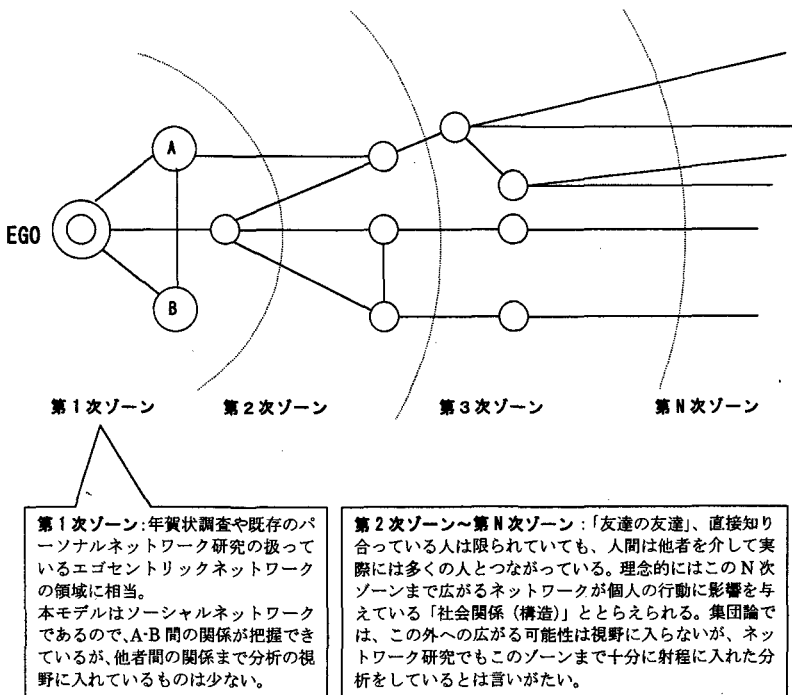
ク研究の方法論的検討に入る前に、ボワセベンの研究の問題関心を紹介することで、ネットワーク研究の意義を再確認したい。ボワセベンのネットワーク研究の出発点は、これまで社会学と社会人類学において採用されてきた社会行動と社会に対する構造—機能的なモデル（容認され裁可された行動規範だけにもとづいて、行為の道筋を決定しているという考え方）への批判から始まっている(注(1))。ボワセベンも、人間の行動が社会構造の制約を受けているという基本的な人間行動に対する説明枠組みは構造—機能主義者と同じであるが、社会構造を固定化されたものとは捉えず、人間の行動によって操作可能なものとして捉えている点で構造—機能的なモデルとは異なった視点もっている(注(2))。つまり、社会構造（関係）を、永続的な「団体的 (corporate)」集団として捉えるのではなく、「実在する人びとが自分たちの抱えている問題を解決するために構築し操作する、一時的で多くの場合きわめて個人的な社会関係のシステム」として捉えている（ボワセベン、1986:32）。

本研究においても、社会関係を固定されたものではなく、個人によって操作されるものとして捉えている。そして、その操作する社会関係の実体こそが、個々の人びととの関係、つまり、ネットワークである。特に、本研究対象である拡大ネットワークは、この過去・現在の—時的なネットワーク形成の集積であると考えられる。つまり、現在、年賀状により関係を維持している人びとは、過去の何らかの時点で対象者との関係が存在した人びとであり、その時間的推移を見ることは、研究目的の「③ライフコースに伴う変容」を捉えることにつながると考えられる。

### 2. 3 ネットワークの広がり

次に、ネットワークの具体的なモデル、分析概念を示しながら、年賀状調査の検討を行う。

ボワセベンは、個人が組み込まれている社会関係関係（構造）を図1のようなネットワークとして表現している。点は人を、線は社会関係を示している。ゾーンの中心人物（ego、調査対象者、



出典：ボワセベン（1986: 48）の図を元に一部加筆修正（図にA,Bを加筆。「第1次ゾーン」第2次ゾーン～第N次ゾーン」の解説を記入）

図1 個人的ネットワークの広がり

インフォーマント)と直接結びついている人が、個人の第1次(first order or primary)ネットワーク・ゾーン(エゴセントリック・ネットワーク)を形成している。そして、中心人物が直接知らない、第1次ゾーンの成員の知り合いが第2次ゾーンを形成している。順次、理論上は第N次ゾーンまで広がり、自分以外のすべての人物を網羅する。

これまでの都市社会学や家族社会学の領域の研究では、主にEGOと直接結びついている第1次ゾーンの紐帯を対象にしている。そして現実には、平均的な個人が日常接触する相手は膨大な数にのぼるので、通常は一定の基準を定めてそれに該当する紐帯のみを取り出した、第1次ゾーンの部分ネットワークを扱っている。しかしながら、この第2次ゾーン以降を分析の射程に収めることは、個人と社会の関係を見るうえでは非常に重要な視点である(野沢、1998、1999)。年賀状により把握できる領域も、従来の研究同様この第1次ゾーンの部分ネットワークである。ただし、本年賀状調査では、対象者と把握できたネットワーク構成員が知り合ったきっかけを聞いている。共通の友人を介して知り合った場合は、第2次ゾーンから第1次ゾーンへのメンバーの移動というネットワーク変容過程を捉えることができる。また、このような第1次ゾーンの紐帯の拡大は、新たな社会環境への移動、新たな機関への参加といったライフコース上のイベントによって引き起こされる場合が多い。その際、図1のネットワークの点を個人に限定せず、学校、職場、サークル活動などの集団や組織と読み替えた場合、それらの諸機関を通

じて第2次ゾーン以降に広がっていた人物の一部が選択され第1次ゾーンへと組み込まれてゆくネットワークの発展・変容をとらえることができる。こうした、第1次ゾーンの構成員との知り合ったきっかけに注目し、ネットワーク発展の契機となっているライフコース上のイベント、それらと関連する機関、地域社会とのつながりなどとの関係を明らかにすることにより、個人が組み込まれているパーソナルネットワークの広がりが個人に影響を与える過程を間接的ではあるが、把握することが可能であると考えられる。

## 2. 4 ネットワーク分析概念と研究方法

ボワセベンネットワークの2者間の相互作用上の規準として「多重送信性(リンケージの多様性)」「取引の内容」「流れの方向」「相互作用の頻度と継続期間」、ネットワークの構造上の規準として、「規模」「密度」「連結度」「中心度」「クラスター」という諸概念を提示し分析を進めている。年賀状調査では、相互作用上の規準に対応する、対象者と年賀状の送り主との関係性についてはほぼ対応する質問項目を設けている。しかしながら、ネットワーク構造上の規準の「密度」「連結度」「中心度」「クラスター」に対応する、年賀状の送り主間の関係性(知人同士の関係)については、全てに関して聞き取ることは調査時間の都合上不可能であるため、本調査では質問していない。そのため、年賀状調査では、ネットワークの構造上の規準に関しては、年賀状の数と近隣数などの追加の質問により把握可能な「規模」のみが把握できる。ただし、年賀状の送り主との関係性を問う

表1 ボワセベンのネットワーク分析概念と年賀状調査との対応

ボワセベンのネットワーク分析概念	相互作用上の規準			
	多重送信性(リンケージの多様性)	取引の内容	流れの方向	相互作用の頻度と継続期間
年賀状調査での対応	知り合ったきっかけ、社会的文脈		現在の付き合い方	

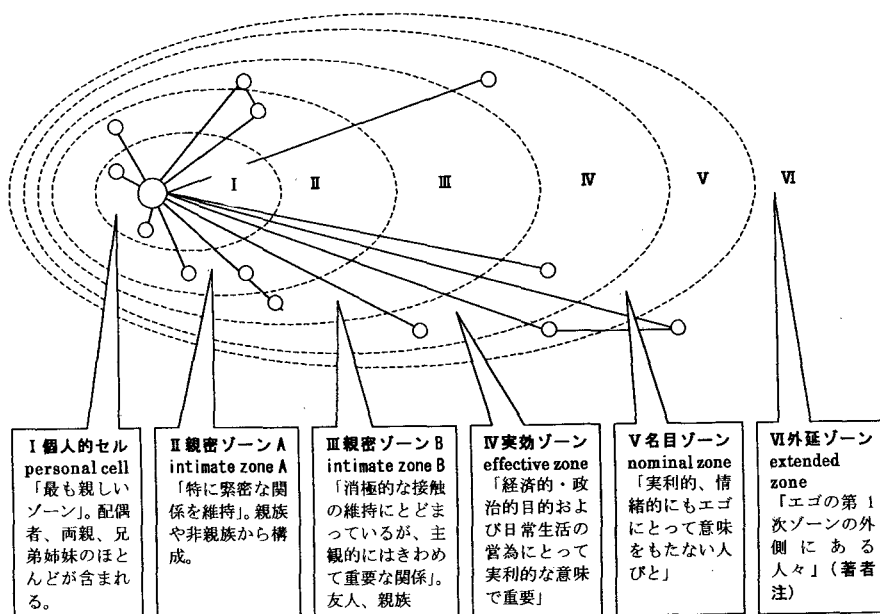
  

ボワセベンのネットワーク分析概念	ネットワークの構造上の規準				
	規模	密度	連結度	中心度	クラスター
年賀状調査での対応	年賀状の数と近隣数の質問	×	×	×	一部間接的に把握

際、後述するように「非常に仲のよい3人組」といった「クラスター」を意味する分類を行う場合があり、間接的には「クラスター」を測定している(表1、図4)。

それでは、これらの分析概念をもとに、ボワセベンはどのような調査分析を行っているのだろうか。ボワセベンは、マルタ島に住む、ピエトルとセシルという二人に対して、それぞれの人物に知っている人物を残らず思い出し、名前を挙げ、

評論(注(3))してもらっている。その結果、ピエトルは1751人、セシルは638人の名前があがった。その上で、自己のネットワーク全体から、「何らかの点で自分たちに特別な意味をもっている人びと」を選別してもらっている。選別は、純然たる主観的・情緒的な規準で行っている。2人は期せずそれぞれ133人を選び出した。そして、それらをさらに下位カテゴリーに分類してもらっている。このような調査過程を踏まえ、個人のネットワー



出典：ボワセベン (1986: 75) を一部加筆修正 (各ゾーンの定義をボワセベンに従い記入)

(著者注) VI外延ゾーンは、エゴの第1次ゾーンの外側と定義されているが、その場合、エゴと紐帯を結ばないことになってしまい、図のように外延ゾーンまでネットワークが延びているのは、定義と矛盾すると思われる。実際の分析にもこのゾーンは扱われていない。

図2 主観的な規準による個人ネットワークの構造化

表2 ボワセベンの調査において親密ゾーンにあげられた人々の内訳

名前	何らかの点で自分たちにとって特別な意味をもっている人びと (約130名)			ネットワーク全体の規模
	I 個人的セル	II 親密ゾーンA	III 親密ゾーンB	
ピエトル	約10名	約20名	約100名	1751名
セシル	約10名	約20名	約100名	638名

参照：ボワセベン (1986: 149-160)

クの構造化をモデル化したのが、図2・表2である。

このように、ボワセベンは、想定できる最大規模の第1次ゾーンの紐帯を把握し、ネットワークの外枠を定めた上で、内部構造を明らかにする手法を取っている。具体的には、ネットワークの規模を測定した後に、その中で対象者にとって主観的に意味があると思われる人物を抜き出してもらい、これら対象者にとって親密な人を分類してもらうことで、「Ⅰ個人的セル」「Ⅱ親密ゾーンA」「Ⅲ親密ゾーンB」というカテゴリーを析出している。但し、図2のゾーンⅣからゾーンⅥに関しては、対象者にネットワーク成員を分類してもらうことはしていない。

このネットワークのモデルは、森岡が「拡大ネットワーク」と呼ぶものとほぼ同様のものを指していると思われる。

## 2. 5 年賀状調査との相違

ネットワークの規模を大きく取ることで、対象者の主観的なネットワーク分類の方法を把握しようとするボワセベンの方法は年賀状調査と共通す

る方法である。しかし、析出された結果には、双方で大きな相違がある。ボワセベンのモデルでは、親しさという一元的な規準でネットワーク全体をカテゴライズすることが可能であるように示されている。しかしながら、本年賀状調査の結果は少々異なっている。年賀状調査では、対象者の主観的なネットワーク分類の仕方を捉えるために、上述のように、自由に年賀状を分類してもらっている。調査開始前は、図3のように、「親族」「友人」「同窓生」「職場」といった交際の社会的文脈の差はあるものの、対象者は全てを一元的な「親しさの度合い」で分類していると予想していた。しかしながら、実際の調査を経た結果、実際の年賀状の分類は図4のようなものであった。つまり、全体を統一する基準で同心円上に区分するのではなく、多くの対象者は、まず、①社会的文脈ごとの区別を行い、②そのカテゴリーごと個々の構成員を区別する基準で分類を行うという、2段階の分類を行った。但し、年賀状の数が少ない場合は、「親しさの度合い」「交際頻度」といった一元的規準で区分を行っていた。

具体的な分類の仕方は、以下のような手順であっ

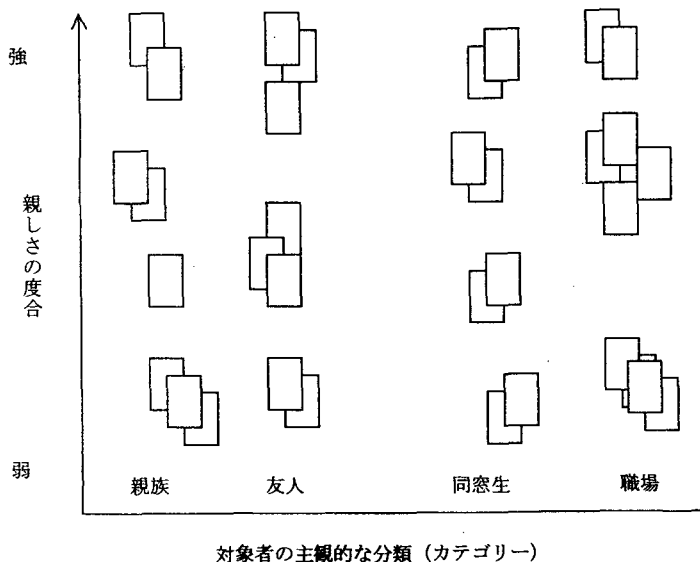


図3 当初想定した年賀状の分類方法

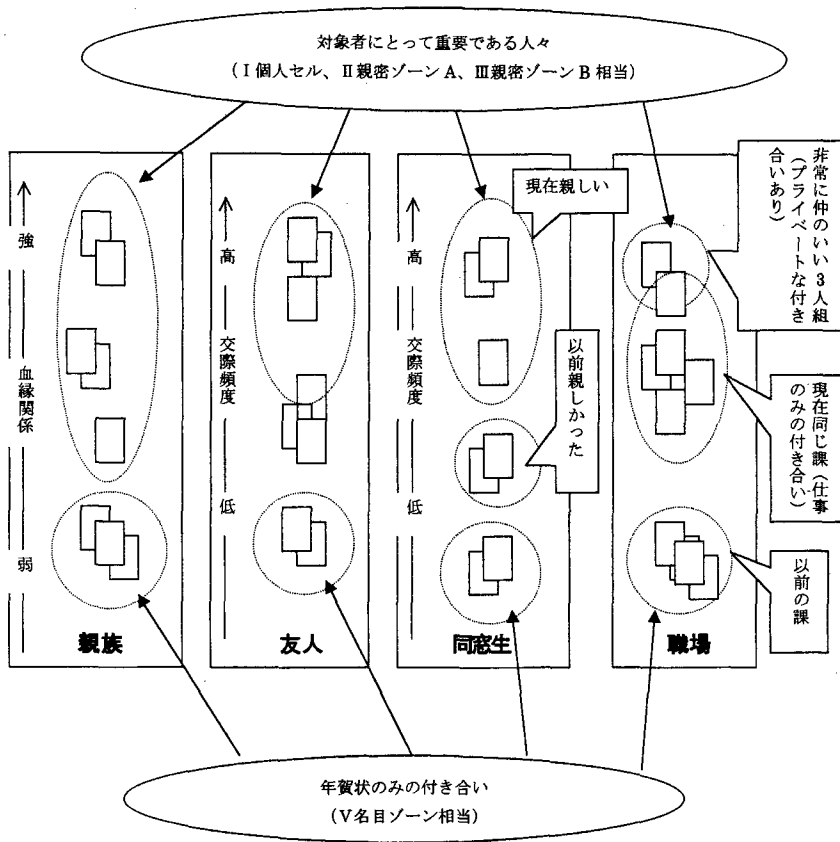


図4 対象者の実際の年賀状分類の一例

た。多くの対象者の場合、まず「親族」を抜き出す。そして、それ以外を、考えながらいくつかの categorie に分類してゆく。そして、いくつかの年賀状ごとの山ができた段階で、調査員から、それぞれのカテゴリごと、対象者にとって重要な順に並べ替えてもらうように頼んだ。その際、多くの対象者は「親族」を血縁関係順に近親者から順番に並べ替え、現在の交際頻度や主観的な親しさとはほぼ独立して分類する傾向にある。親族以外の分類規準は、対象者ごと様々であった。「交際頻度」「親しさの度合い」などの一元的な規準の場合もあれば、各カテゴリ内の構成員を区分する規準が複数組み合わせられている場合もあった。特に、現在付き合っている人だけでなく、過去と現在の付き合いがあった人が同一カテゴリに含まれる場合は、「交際頻度」「現在の親しさ／過去

の親しさ」「知り合った場所ごと」規準が組み合わせられて分類されている(図4の「同窓生」「職場」など)。

ボワセブンの対象者は、1960年代のマルタ島という比較的小さな社会に生活する人であった。一方本研究が対象としているのは、2000年前後の日本の大都市(福岡、東京)に生活する人々である。そのため、本調査では、都市の流動化等の影響が強く現れた結果が、パーソナルネットワークの分類の規準を複雑にしていると思われる。現代のパーソナルネットワークを分析する場合、ボワセブンのような親しさによる一元的なモデルを想定するのではなく、ボワセブンが想定したようなモデルが社会的文脈ごと複数形成されているモデルを想定する方が適当であろう。そして、この社会的文脈ごと異なった分類の規準に注目して、パー

ソナルネットワークの発展・形成過程を把握してゆく視点が重要であると考えられる。

## 2. 6 年賀状調査の特徴

年賀状調査の方法論的特長をまとめるなら以下のようになろう。まず、年賀状調査はパーソナルネットワークの第1次ゾーン（対象者と直接つながる紐帯）の全体ネットワーク（拡大ネットワーク）に注目した研究方法だといえる。そして、対象者がこの全体ネットワークに対して、どのような主観的な区分をしているのか、つまり部分ネットワーク（分類カテゴリー）構造化の規準を把握することで、ネットワーク内部の動的な分化を捉え、現在のパーソナルネットワーク形成に至る発展過程を明らかにする分析方法であると言える。特に、これまで「同窓生」「同僚」「趣味の友人」…とそれぞれ部分ネットワークとして別々に扱っていたものは、その形成時期に注目した場合、ライフコースと密接な関係をもっている。これらの様々な部分ネットワークの集合である拡大ネットワーク（全体ネットワーク）を分析対象とすることで、これまで断片的に扱ってきたものを、ライフコースという時間軸に統合して分析することが可能になった。また、逆に、ライフヒストリー研究として、ネットワークの分類を手がかりとして、対象者のライフヒストリーを再構成することも可能である。

このように、年賀状を手がかりとすることで、多くの部分ネットワークの把握を目指しているが、その一方で、年賀状では抜け落ちてしまう部分ネットワークもある。その代表的なものは「近隣関係」である。年賀状は儀礼的な意味合いもあるため、特に、頻繁に付き合いのある「ご近所さん」「近親者」は抜け落ちてしまう場合がある。また、若年男性やブルーカラー従業者において、年賀状のやり取りが少ない、もしくは行っていない場合もある。逆に、ホワイトカラー従業者は仕事上多くの人と付き合いの機会が生じ、年賀状のやり取りの枚数が増える傾向がある。しかしながら、個人が頻繁に付き合える人数には限りがあるので、年賀状の枚数が多いことが必ずしも多くの人と密

度の高い継続的な交際をしているとは限らない。むしろ、年賀状の枚数が多い人は、常に一時的なネットワークの再編を繰り返しながらパーソナルネットワークを形成するという特徴をもっていると考えた方が適当であろう。そして、現在は疎遠になった部分ネットワークのその集積結果として、年賀状が多くなっていると考えられる。

## 3. 事例紹介：地域活動リーダー層のパーソナルネットワーク

### 3. 1 調査対象

本節では、地域活動リーダー層を対象としたパーソナルネットワークの事例を報告する。第1回の年賀状調査では、拡大ネットワーク自体の把握がその主目的の一つであったので、特別な対象者の絞込みをすることはしなかった。しかしながら、年賀状調査の方法論を再考した結果、年賀状調査はライフコースに沿ったパーソナルネットワークが形成発展する過程が描ける所にその特徴があることが分かった。そこで、このパーソナルネットワーク形成発展過程により焦点を当てるために、同じ活動に参加している方を対象者に選び、対象者がその活動に関わるようになった経緯を、パーソナルネットワークの再編という視点から明らかにしようと考えパイロット調査の意味も含め、本調査を実施した（矢部、2001）。

具体的には、「三鷹コミュニティセンター」を通じた地域活動参加者を対象とした。本研究会のメンバーの1人が、武蔵野市K協議会に参加し活動していることから、協議会メンバーに調査趣旨を話していただき、協力を得られた2名を対象とした。調査は、1999年11月23日午後1時～午後4時、1999年11月26日午前10時～午後3時、1999年12月2日午前10時～午前12時の3回にわたって行われ、K施設内と対象者の自宅で行われた。

### 3. 2 K団体とは

最初に、武蔵野市コミュニティセンター全体と、本調査の対象者が所属しているK団体の特徴を明



らかにしよう。武蔵野市では1971年につくられた『第1基本構想・長期計画』において、「地域生活単位」というかたちで武蔵野市コミュニティ構想が提起されている。1976年に第1号のコミュニティセンターが境南町にできる。いずれも市民みずらかによる設計、運営、管理が行われているセンター17館の配置が1992年に終了している。

松下(1999)によれば、武蔵野市コミュニティセンターの特徴は、「コミュニティをユートピア幻想、あるいは町内会再編のいずれでもなく、人々が挨拶できる程度の市民交流チャンスづくりと位置づけている点」と指摘されている。そして、具体的な特徴を以下のように語っている。

市民は好みに応じてどのセンターも自由に使えるように考えただけでなく、センターの設計自体も市民設計とし、地下スポーツ施設あり、茶室あり、またゆずりうけた芸術家の木造屋敷をそのまま使うなど、17館がそれぞれ個性的なものとなっている。職員設計だったら地域平等を考えるため、かつての学校建築のようにかえて画一的なものとなっただしょう。

そのうえ、地域市民の市民設計、市民運営、市民管理ですから、職員を一切配置せず、本庁に1人だけ連絡係を置くという形で出発しました。公民館でしたならば、武蔵野市は富裕市ですから、安易に1館5人ぐらいの職員を置き、今日の17館では85人の職員配置となり、……(中略)……、人件費だけで年間10億円、10年で100億円の人件費がかからずに済んだことになり、あるいは公民館だったら人件費がかかるため17館どころか数館しかつくれなかったでしょう(松下、1999:225)。

このように、武蔵野市のコミュニティセンターは、建物の設計段階から建設後の実際の運営にいたるまで真の意味での市民参加によって成立している非常に特徴的な施設と言える。

次にK団体が発行しているパンフレット「K」と10周年記念誌「まちをつくる」を参考に、K団

体の簡単な紹介を行う。本調査の協力者が所属している「K」の発端は、1982年5月に「中央北コミュニティセンター建設準備会」が発足したことに始まる。建物の用地探しから設計まで、多くの住民が主体的に参加し、1984年11月の「K協議会」への改称を経て、1989年12月16日「K団体」が開館する。開館まで7年半の歳月をかけており、その間設計家は無償で15案にもわたる基本設計の図面を作成するなど、地域住民の自主的な参加のたまものが、このKである。運営委員会は月に1度、日曜日の午後と火曜日の夜月代わりで開催されている。この運営委員会が基本的に「K」の運営を司っている。

### 3. 3 調査方法上の制約

調査開始後判明したことであるが、「K団体」では年賀状のやりとりはお互いにはしないきまりになっていた。どうしても出したい場合は、「K団体」宛に1枚出すことになっているそうである。しかしながら、調査を進めて行く内に、「K団体」に参加するようになってからコミセンを通じて知り合った者との年賀状のやり取りは確かにしていないが、それ以前から既に知り合いであった人、すなわち、コミセン以外での社会的つながりを有している人とは年賀状のやり取りは行っている事が分かった。そのため、年賀状をもとにしたパーソナルネットワーク把握では、「K団体」内部の関係性を捉えることは難しいが、どういった社会的つながりの中から、現在のコミセン活動に至ったのかという経路は把握が可能である。また、「K団体」以外のパーソナルネットワーク形成に関しては、これまでの調査同様きちんと把握することが可能である。以上のことが確認できたので、調査を進めた。

### 3. 4 【事例1】 PTA活動から「K」へ

#### (1) Mさんのライフヒストリー

Mさんは42歳の主婦である。現在は月15日ほどパートに出ている。家族は、夫と19歳の長男を筆頭に3人の子どもがいる。以前は武蔵野市に住んでいたが、2年前に保谷市に引っ越す。それにも

関わらず、現在も「K」の活動には関わっている。出身は新潟県。地元の高校を卒業し就職。22歳の時、新潟で結婚。その後すぐ、夫が吉祥寺に転勤。1年間吉祥寺に居住後、3年間マレーシアに転勤。31歳（平成元年）に武蔵野市に戻ってきた。40歳の時に保谷市に移る。41歳の時からパートを始め、現在に至る。

を持ち、外に目をむけようと思っていた時、コミセンで「野外ペイント」の企画があった。イベントに参加している内に、何となく企画側に誘われて手伝うようになる。子ども達がイベントに参加し、自然に絵を描き出す姿を見ていて非常に面白く感じた。子ども達を遊ばせることもでき、非常に良いことだと思い参加するようになる。また、

表3 Mさんのパーソナルネットワークの様相（年賀状 計60枚）

分類	枚数	特徴
1. PTA	7枚	子ども関連
2. 子育て期	10枚	
3. 先生	7枚	
4. 友人	16枚（夫婦6ペア）	社宅関連
5. 高校時代までの友達（新潟）	3枚	儀礼的
6. OL時代の先輩	1枚	
7. 親類	11枚	
8. 公的なもの（市長、コミセン、宣伝）	5枚	

年賀状以外	人数	特徴
1. パート先の仲のよい3人組	2名	新しい関係
2. くされえん	2名	子ども関連

## (2) Mさんのパーソナルネットワークの特徴

Mさんのパーソナルネットワークは、表3のように分類された。一般的な年賀状調査の場合、まずは親族を別個に分けるのだが、本調査の場合、初めからコミセンとパーソナルネットワークの関係に関心があると対象者に伝えていたため、対象者にとって「K団体」と関連のある「PTA」というカテゴリーが最初に分けられた。ここであげられた7名は、「子どものPTAと一緒に役員をやったお母さん方」である。その中でも、「長男が小学校1年生の時のPTA役員と一緒にやった方」とは非常に親しく14年来のつき合いである。彼女もコミセンに関係しており、3日に1度は顔を合わす。

彼女自身がコミセンに関わるようになったのは、6年前からである。それより2年前程から、「Kまつり」などに単にお客さんとして参加していた。もともとPTA活動は熱心に参加していた。PTA活動だけでなく、少しまちづくり的な活動に興味

PTAと異なり、子どもが大きくなっても、自分の楽しみとして参加できるところが気に入っている。「PTA仲間」をコミセンのイベントに誘うこともある。

このように、彼女は、直接誰かに誘われたわけではないが、PTAの経験から、それよりも広がりのあるコミセンの活動への興味を持ち、参加するに至っている。余りにも、模範的すぎるかも知れないが、PTAのような特定の世代だけでなく、住民全体に開かれているコミセンの良さが上手くそれを求めている住民を呼び込んだいい事例ではないだろうか。このような、PTA活動経験を背景として、そこで培ったノウハウなどを活かしながら、コミセン活動へと関わるパターンは比較的多いと推測される。

彼女の場合、子どもが3人いることもあり、どうしても、パーソナルネットワーク形成の多くが子どもに関連している。「2. 子育て期」と分類されたのは、「これまで何回か転勤をしている時

の社宅で一緒だったお母さん友達」である。現在は、社宅暮らしではないので頻繁に会うことはない。但し、コミセンのメンバーもいるので、その方とは週に4回ほど会う。また、「武蔵野の社宅のメンバー」とは、現在でも月に1回ぐらい、相手の家を尋ねたりして親交が続いている。

「3. 先生」は、「自分の高校時代の先生」と「子ども達の学校の先生」である。現在末娘さんのPTA関係で顔を合わす間柄である。コミセンの近くに住んでいる方には、コミセンのイベントに誘ったり、学校にチラシを配りに行ったりもしている。

次の「4. 友人」というカテゴリーからは、直接的な子どもを介した関係ではなくなる。このカテゴリーの中で最も親しいのは、「夫同士が同じ会社で、毎週会社のテニスクラブでテニスをする4組の夫婦（「テニス仲間」）」である。彼らとは10年程のつき合いであり、毎週テニスをした後、誰かの家で食事をする間柄である。コミセンのイベントに声をかけることもある。他は、直接子ども達関連ではない、「社宅で一緒に、コミセンに参加している女性達」や「社宅で一緒だった方たち」が分類されている。

「5. 高校時代までの友達（新潟）」「6. OL時代の先輩」は、「毎年帰省した際に会う方」が1名いるが、その他は年賀状のみでつき合いが続いている人物である。「7. 親戚」に関しては、特に頻繁な交際はない。年1回程度帰省し、後は電話連絡といった程度である。「8. 公的なもの」には、コミセンの活動をしている関係上、市長やコミセンからの年賀状が来ている。他は保険や建設会社といった宣伝関係である。

### (3) 年賀状以外に関して

年賀状以外の重要な関係としては「1. パート先の仲の良い3人組」「2. くされえん」の2つのカテゴリーが析出された。「1. パート先の仲の良い3人組」はここ1年で形成された非常に新しいネットワークである。他の仲間を入れない非常に親しい3人（対象者含む）である。仕事の帰りにお茶をしたり夕食を共にしたりする。また、

「2. くされえん」は、息子が小学校1年生の時に知り合った14年来の仲間である。そのうち1人とは、全ての局面において親しく、相手の年齢が上という安心感もあり、自分が入院した際には、家の中に入って掃除、台所をやってもらえる間柄である。上述した「テニス仲間」にはここまでは頼めないようだ。また彼女はコミセンにも関係しており、週に4日ほど顔を合わす。この仲間は、「パート先の仲の良い3人組」とのつき合い方とは異なり、他のメンバーを入れて集まったりする。ある程度関係性が確立してきている仲間であり、今後も続いて行くであろう「人生のみちづれ」として意義をもっていると考察される（Plath、1980）。

年賀状には、日常的に良く顔を会わす人や近隣関係は現れにくいという欠点をもっている。対象者の場合は、上記の「1. パート先の仲の良い3人組」「2. くされえん」において、日常的に頻繁に顔を会わす関係は大方、網羅していると考察される。近隣関係において、現在の保谷市での関係が出てきていないが、これまでのライフヒストリーを見てみると、社宅暮らしが長く、この関連は拾えていることから、おおよそ全体のパーソナルネットワークを把握できたと考えられる。

### (4) Mさんのパーソナルネットワーク形成への考察

専業主婦のパーソナルネットワークを考えた場合、どうしても子供の学校関係を中心としたパーソナルネットワークに偏ってしまうことは十分に予想される。しかしながら、いずれは子どもは卒業してしまうため、PTAなどをきっかけにした関係を続けて行くのはなかなか難しい。本事例のように、自主運営を基本とするコミセンの存在は、PTA活動などを通じて芽生えた問題意識を、より地域という大きな文脈で活かす非常に良い機会だと思われる。この側面から見た場合、コミセン設立当初に想定した、「コミュニティをユートピア幻想、あるいは町内会再編のいずれでもなく、人々が挨拶できる程度の市民交流チャンスづくり」という目的は、現在の所比較的達成出来ているのではないだろうか。本事例においても、対象者と

親しい間柄であっても、コミセンに参加している人もあれば参加していない人もいる。対象者自身も、誰にでも声をかけるのではなく、手伝ってくれそうな人を選んでいと述べている。

現在の対象者のパーソナルネットワークは、「社宅関係」「子ども関係」といった、ネットワーク形成のきっかけを中心とした構成と、日常的に頻繁に会う年賀状には現れてこない「パート先の仲の良い3人組」と「くされえん」といったつき合い方の質による枠組みで形成されている。対象者が今後もコミセンの活動を続けて行くのであれば、今後対象者のパーソナルネットワークは、現在のような知り合ったきっかけを中心とした分類から、後者のような、つき合い方の質による分類が生まれてくるのではないだろうか？例えば、「友人」の中には、既に「テニス仲間」といった関係性の質による下位カテゴリーが生まれている。現在、対象者は、社宅を出て保谷市に居を構えており、子ども達も大きくなるに従い、同じ社宅や子どもが同級生といった属性的なつながりから、ある程度選択的な関係性へと移行しているように思われる。実際問題、6年前よりK団体の運営に関わるようになってから、この既存のパーソナルネットワーク内で選択的にコミセンに関わってくれそうな人に声をかけている。対象者が今後も、コミセンの運営に関わって行くのであれば、コミセンを軸としてパーソナルネットワーク構造の再編が起きるかもしれない。都市の機関との関連によるパーソナルネットワークの再編は、パーソナルネットワーク構造を考える上でも非常に興味深い点であり、今後の課題としたい。

### 3. 5 【事例2】 地元少年野球から青少年協議会を経て「K団体」へ

#### (1) Tさんのライフヒストリー

Tさんは67歳の男性である。K団体から徒歩10分ぐらい所に、長男夫婦と一緒に2世帯住宅に住んでいる。昭和37年から現在まで、国立市で学校法人の職員をしている。Tさんは、16歳（昭和23年）まで樺太で過ごす。その後、福島県の新制中学校に入学。卒業後、上京。昼は高校の事務員を

やり、夜間定時制高校に通う（S高校時代）。定時高校卒業後、M学院大学に進み、剣道とESSの活動に熱中する。大学在学中から品川の中高の夜間の非常勤を務め、卒業と同時に常勤（昭和32年、25歳）。昭和35年に結婚し、吉祥寺に住み始め現在に至る。昭和37年頃からNHK学園の設立に関わり、通信高校講座を担当する。昭和45年ごろ地域の少年野球の監督・コーチを任される。昭和54年には、地区青少年問題協議会委員に抜擢され、昭和57年には市教育委員会の青少年委員に就任。同じ頃から、住民協議会の2代目代表となり「K」の活動にも関わり始める。平成6年にはシルバー人材センターに登録し、7年より活動を開始している。

表4 Tさんのパーソナルネットワークの様相  
(年賀状 計342枚)

分類	枚数	特徴
1. 親戚	26枚	親戚
2. 友人先輩（樺太・福島時代）	57枚	時代別区分
3. S高校	46枚	
4. 大学時代	21枚	
5. NHK学園職場関係	129枚	
6. NHK学園学生関係	30枚	
7. 地元	33枚	地元

年賀状以外	人数	特徴
1. 地元関係	4名	地元関係 (K関係)
2. Kの暮の同好会	20名	
3. Kのシャンソンの会	30名	

#### (2) Tさんのパーソナルネットワークの特徴

Tさんは、教員経験もあることから、非常に筆まめであり、これまで縁のあった多くの方と年賀状を通じたつき合いを続けている。枚数も多く、342枚に及ぶ。主観的なパーソナルネットワーク区分の仕方としては、まず、「親戚」を分けた後に、残りを、時代別に区分し、余ったものを「地元」としている。年賀状以外の重要な関係としては、「地元関係」があげられた。

「1. 親戚」に関しては、これまでの対象者同様、血縁順に紹介してくれた。まず最初に自分の兄弟、次いで、娘、妻方親族と続いた。都内近郊

に住む親族とは年1・2回程度会う。妹は世田谷に住んでいることもあり、月1回程度会う間柄である。

「2. 友人先輩」は、中味を見ると、幼少時代の樺太、福島時代の仲間である。中でも最も親しいのは、「樺太時代に親戚同様のつき合いをしていた自分の同級生2人」と、「その弟」の3名をあげた。彼らの親が天理教の信者で布教のために先に樺太に来ていた関係もありいろいろと良くしてくれたそうだ。苦労を共にした仲間である。現在は、北海道、奈良、福島とばらばらであり、なかなか会う機会はないが、心理的には最も大切にしている人々である。次いで、大切な人として、樺太時代の先生2名をあげた。先生をはじめとして、樺太時代の関係は「川上の会」という同郷の会を作っている。関東圏にいる仲間とは、2～3年に1回集まっている。

「3. S高校」は、対象者が事務員をしながら夜学に通っていた時代にお世話になった人たちである。同窓会などで年に1回会う程度の関係であるが、当時お世話になった理事長さんや、教員の先輩方との年賀状のやり取りは忘れない。

「4. 大学時代」も同様に、大学時代にお世話になった人物である。剣道部の仲間、ESSでの仲間が中心で、年1回程度の同窓会で会う程度である。次いで最大の人数を有しているのが「5. NHK学園職場関係」である。立ち上げ期から現在に至るまで、お世話になった人が分類されている。現在も、関連する仕事に携わっているので、打合せなどで年1回程度顔を会わす人が多い。

「6. NHK学園学生関係」も同様に、年1回程度同窓会で会う程度である。これらの、分類の仕方非常に興味深いのは、各カテゴリーに分類された1人1人を我々調査者に説明するときの順番の付け方である。本調査では、最初に全体を対象者の基準で幾つかのカテゴリーに分けてもらった後に、そのカテゴリー毎にさらに、何らかの基準で分けてもらい、1枚1枚予め決めておいた「この方とはどの様なお知り合いですか」「知り合ったきっかけ」「知り合ってから期間」「現在会う頻度」「性別」「年齢」「職業」「学齢」「住所」を聞

いて行く。その際、多くの方は、自分との「親しさの度合い」や「一緒に集まるグループ」といったつき合い方の差などを基準とした分け方を行う。しかし、本対象者の場合、「2. 友人先輩」としたカテゴリーに関してはそのような分け方に近かったが、他のカテゴリーに関しては、基本的に、当時お世話になった目上の方から順番に人物を選んでいった。また、同じような関係の場合は、職業上の地位、年齢といったもので順番を決めていた。時折、どちらを先に紹介して良いのか悩む場面も何回かあった。「無理に、地位で順番を決めずに、Tさんにとって身近な人から紹介していただければかまいませんよ」と、調査中声もかけたが、この時代別に区分したゾーンでは一貫して、当時お世話になった程度と上下関係など地位を基準とする順番で個人を区分していた。これは、時代的な背景もあると思われるが、現在余り頻繁に会う間柄でない場合、ある種機械的な規準が採用されたと考察される。その一方で、地元関係は、現在も週1回程度は会う機会がある人達であることもあり、単なる地位による区分ではなく、対象者との関係性が反映した意味づけを個々人に付与している。

「地元」において真っ先にあげたのが、「長女の幼稚園の時の同級生の父親で35年来の知り合いの79歳の男性」である。この方とは一緒に「少年野球の世話役」をやった。「住民協議会」の初代会長でもある。次いで、「少年野球チームの2代目事務局長を務め、約30年のつき合いである64歳の女性」の名が上がった。彼は地域活動に熱心な方で現在もガーデニングや婦人運動に積極的である。基本的には、「少年野球関連」、「青少年問題協議会関連」、「コミセン関連の50代以上の人」がこのカテゴリーに含まれており、たいていの人は近所ということもあり週1回以上顔を会わす。

このカテゴリーの関係性において非常に興味深いのは、現在この地区でコミセンに関わっているTさんぐらの年齢の男性は、大抵が、まず「少年野球の世話役」を経験し、その関係で「青少年問題協議会」に引き込まれ、この「少年野球」「青少年問題協議会」を通じて知り合ったネットワークを通じて、コミセンの準備活動に誘われ参

加している点である。特に男性の場合、この「少年野球」のネットワークは、子どもとの関わりを通じて地域への関心が自然に高まることから、潜在的な地域社会活動参加者となつながら重要な資源であると考えられる。また、「少年野球」の世話役の場合、監督やコーチといった実技の指導者は男性になることが多く、世話役は男女が混ざって行っている事が多い。そのためPTAと較べると、男女間の情報のブリッジになる可能性が高い。事実、Tさんの場合、2番目にあげた「少年野球チーム2代目事務局長の女性」に「K団体」設立の集いに誘われたのが、「K」に関わるきっかけである。その会合で、地元の男性にも参加して欲しいとの要望を聞き、1番にあげた79歳の男性を紹介した。彼の奥さんの強烈な反対があったものの、最終的には彼が協議会の初代会長に就任している。

### (3) 年賀状以外

ここでは、最近参加したシルバー人材センターの仲間の中で、「自分の良き理解者」という4人を真っ先にあげた。シルバー人材センターには、5年前から登録している。フルタイムはきつけれど、週1回の補習塾英語ぐらいなら出来ると思ひ登録した。実際には週に2、3回出て、パソコン入力や放置自転車の管理などをやっている。彼らは地域活動やKの活動に理解を示してくれ、地域の身近な話をする間柄である。彼らは、地元ではあるが、「少年野球」、「青少年協議会」、「K団体」に関連する地元とは異なった新しいゾーンを形成している。また、「K団体」でも世話役のみに追われているのではなく、月1回暮の同好会に参加し、6月からは月2回シャンソンの会に参加している。

### (4) Tさんのパーソナルネットワーク形成への考察

本対象者のパーソナルネットワーク区分の年代別に分けられた部分だけを見たならば、地域と離れた、典型的な会社人間といった印象を受けるであろう。しかし、「少年野球」を契機とした地元との関係を持つことで、実際には、非常に多様な地域社会と関連をもつパーソナルネットワークを

形成している。男性の地域社会との関わりを考えると、このような「子どもの運動関係の活動」は、単なる自分の子どもの体力増進や楽しみづくりといった個人的・家族的なレベルに留まらず、「青少年協議会」のような公的な役割への展開や、「同じ世話役のお母さん達」を通じての地域問題の情報が入ってくる重要な情報経路の形成など、社会への非常に大きな広がりをもっていることを本事例は示唆している。確かに対象者は教育職に就いており、普通の人に較べれば地域の問題に関しての関心は高かったと思われるが、もし、少年野球の世話役をしていなかったら、現在のような地元関係のパーソナルネットワークを形成していたかは疑問であろう。本調査では「少年野球」と「青少年協議会」といった流れしか見出すことが出来なかったが、本対象地には、このほかにも、その活動のみに留まらず、大きな広がりをもつ可能性のある地域活動が存在しているのだと思われる。そして、そのような様々な活動を通じて、多くのパーソナルネットワークが結びつく中で、地域市民の市民設計、市民運営、市民管理という非常にハードルの高い市民自治によって成り立っている武蔵野市のコミュニティセンターが成立しているのだと考察される。

## 4. まとめと考察

個人は、自分が接触可能な人物の中からしか親しく交際する人物を選択することはできない。そして、この個人が接触可能な人物は、個人が加わっている社会的文脈によって制限を受けている。これらを制限する社会的文脈としては、ジェンダー的地位、家族内地位、ライフサイクル上の地位、職業的地位などの社会経済的地位、参加している諸集団、居住地などが想定される(Fischer, 1982; Allan, 1989=1993, 1996)。そして、このような様々な社会的文脈によって制限を受けている個人が接触可能な人物たちの集合が、本研究の対象の拡大パーソナルネットワークであった。そのため、この拡大パーソナルネットワークの形成過程を捉えることで、個人と社会の関係を見出すことが可能に

なる。

また、本章で紹介した事例により明らかなように、個人のパーソナルネットワークは関係性を常に再編成している。始まりは、単なる近隣関係であったものが、偶然同じ趣味サークルに参加したことで、個人的な付き合いもするようになるといったように、関係性が単紐帯から多重送信的な関係になることで、密接な交際へと変わって行く。また、学校時代の友人や同僚のように、卒業や異動により疎遠になってゆく人々もいる。拡大ネットワークの中には、このような様々な個人のネットワークの側面から見た個人のライフストーリーが埋め込まれていた。また、ネットワークの再編は、このような自然に親しくなった場合や、ライフコースに伴う変容ばかりでなく、特定の目的を意図して積極的な再編成（コアリッション）を行う場合もある。この場合、直接つながっている人物ばかりでなく、友達の友達（第2次ゾーン）が重要な意味をもつ場合もある。本事例のTさんの場合、コミセン活動参加のきっかけは、直接の友人であるが、その後の活動がスムーズに行くためには、その知り合いを会して新たに知り合う人との関係が良好に行くかが重要である。その際、仲介者となる友人が対象者と新たなメンバーの双方にとって信頼の置ける人物であることが、スムーズなネットワーク再編のかぎを握っていると思われる。つまり、双方にとって信頼感がおけるのであれば、短期間のうちに親密な関係性、つまり、コミセン活動だけではなく、他の関係性も共有する多重送信的な関係に発展する可能性があると考えられるからである。

今後は、本調査のように同じ集団に所属する人を対象に事例数を増やすことで、これまでの調査で見えてきた、様々な社会的文脈が拡大パーソナルネットワークに与える制限と、新たな広がりプロセスを詳細に明らかにしたいと思う。また、対象を拡大パーソナルネットワークのみに限定するのではなく、対象者が共通に参加している集団全体にも広げ、現時点では手が回っていない、「密度」「連結度」「中心度」といったネットワーク構造に関する変数を測定し、ネットワーク構造

と、集団形成、運営等も視野に入れた研究を目指したい。

## 注

- 1) 「われわれの前には、社会構造とは何であり、それはいかにして維持され、そしてさまざまな制度体がどのように相互関連して諸関係のシステムを形成するのかを詳細に説明するモノグラフが提出されている。さらにまた、価値体系がこの構造をどのように支持しているかについても提示されている。しかし、このなかでは、未解決の部分はその分析がすべて巧妙に凍結されている。つまり、提示された規範図式にあてはまらない行動は無視されるか、あるいは「逸脱」や「例外」として排除されてきたのである。しかし、この例外的な行動も目下研究中の同じ社会システム内で生ずるものなだから、これでは問題を解決したことにはならない。例外的な行動も、当該社会システム内で作動している要因によって説明されねばならないのである。要するに、われわれの前に提示されているのは、システムがどのように作動すべきであると人類学者が考えているのか（それはまた多くの場合、インフォーマントが人類学者にどのように考えてもらいたいかということでもある）というモデルなのである。つまり、問題になるのは、提示されているシステムが理想的なものかどうかである。」（ボワセベン、1986：30-31）
- 2) 「人間を集団や制度複合体の成員で、それらの規範や圧力に従順で受動的な存在とみなすのではなく、自分自身の社会的利益や心理的利益のために、規範や関係性を操作しようと試みる事業家」ととらえる（ボワセベン、1986：25）。「人間は道徳的な存在であると同時に、自己本位の操作者でもあり、選択可能な複数の行為の道筋からそのいずれかを選択することによって、自己の地位を改善したり維持しようとしている」（ボワセベン、1986：23）
- 3) 上述のネットワーク概念を算出するのに必要な情報の他に、それぞれのネットワークメンバーに、「性別」「年齢」「教育程度」「職業」「居住地」といった属性に関する質問をしている。

## 参考文献

- K協議会「K」（利用案内のパンフレット）、1989。  
 K協議会編『まちをつくる：新しい結びつき・Kの10年』1999。  
 野沢慎司「職人の生活史と東京下町の変貌：時代と磁

- 場と自我のジレンマ」, 倉沢先生退官記念論集刊行会編『都市の社会的世界: 倉沢先生退官記念論集』UTP製作センター, p.327-354, 1998.
- 野沢慎司「家族研究と社会的ネットワーク論」, 野々山久也・渡辺秀樹編『家族社会学入門: 家族研究の理論と技法 (社会学研究シリーズ1)』文化書房博文館, p.162-191, 1999.
- 藤崎宏子『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館, 1998.
- 前田信彦「年居高齢者のパーソナル・コミュニティ」, 『都市問題』第86巻, 第9号, p.41-52, 1995.
- 松下圭一『自治体は変わるか』岩波新書 (新赤版638), 1999.
- 森岡清志「拡大パーソナルネットワーク分析の方法と意義—年賀状調査事例から—」, 金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房, p.150-169, 2001.
- 森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会, 1999.
- 森岡清志 (研究代表者)『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』平成11年度～平成12年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書, 2001.
- 矢部拓也「年賀状事例調査を通じての大都市のパーソナルネットワーク」, 『総合都市研究』69号, p.137-150, 1999.
- 矢部拓也「事例分析: 年賀状調査による拡大パーソナルネットワークの分析」, 森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会, p.161-193, 2000.
- 矢部拓也「年賀状調査の問題設定と本研究の課題」, 森岡清志 (研究代表者)『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』平成11年度～平成12年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書, p.127-135, 2001.
- Allan, Graham, *Friendship: Developing A Sociological Perspective*, Havester-Wheatsheaf, 1989, 中村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社, 1993.
- Allan, Graham, *Kinship and Friendship in Modern Britain*, Oxford University Press, 1996.
- Boissevain, Jeremy, *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, Basil Blackwell and Mott LTD., 1974, 岩上真珠・池岡義孝訳『友達の友達: ネットワーク, 操作者, コアリッション』未来社, 1986.
- Fischer, Claude S., *To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City*, The University of Chicago Press, 1982.
- Granovetter, Mark, *Getting A Job*, The University of Chicago Press, 1974, 1995, 渡辺深訳『転職: ネットワークとキャリアの研究』ミネルバ書房, 1998.
- Plath, D.W., *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press, 1980, 井上俊・杉野日康子訳『日本人の行き方—現代における成熟のドラマ』岩波書店, 1985.

#### Key Words (キー・ワード)

Loose-network (week ties) (拡大ネットワーク), Personal Network (パーソナルネットワーク), New Year's Cards (年賀状), Life-course (ライフコース), Social Context (社会的文脈)



The Loose-network of Non-metropolitan Cities:  
Case Study using New Year's Cards (Nengajo)  
I Reconsideration of the Loose-network and the Method of  
Case Study using New Year's Cards (Nengajo)

Takuya Yabe\*

\*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University  
*Comprehensive Urban Studies*, No.76, 2001, pp.97-113

The purpose of this paper is to reconsider the method of a case study of personal network using New Year's Cards(Nengajo). The case study of this kind was conducted twice for the analysis of the loose-network(week ties). I have compared the method of our study with Boissevain's network study for the clarification of the advantage of the method used in our study. The case study using New Year's Cards has an advantage in analyzing interrelationship between ego and others. However, it also has a disadvantage in analyzing the structure of the network (e.g. the density of network).

This study describes the inner-structure of individuals' personal network. At first individuals' personal network is classified into some categories based on social contexts, for example, kin, friends, colleagues, club activity's members and so on. Second, each category is subdivided. There are many criteria for such subdivisions of personal networks, for example, intimacy, frequency of meeting, and so on. These factors are closely related to individuals' life-course. Therefore, it is possible that we describe the processes of how individuals' personal networks come to form and how their life-course is related in such processes.

Furthermore, two case studies are examined, using New Year's Cards as a methodological tool. They clearly show the methodological advantages described above. The two informants in this study are the members of a community organization in the Musashino-city. I have described the process of their participation in community activities from a viewpoint of the relationship between their life-course and reorganization of their personal network.